

---

# 秘密

伊藤 幸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秘密

### 【Nコード】

N0241K

### 【作者名】

伊藤 幸

### 【あらすじ】

藤田楓は最愛の恋人、斎藤陽一を刺殺してしまう。そして、楓はその場に陽一を残したまま逃げってしまう。しかし次の日も、その次の日も警察が楓の元へ来る気配がない。そんな時、安藤浩二という男から楓の元に電話がかかってきた。安藤浩二とは一体何者なのか。そして楓はこの先どうなってしまうのか。

3月2日

雨が降り出した。

目の前には、陽一がうつぶせに倒れている。

楓の手には陽一の血で染められたナイフが握られている。

「あたし、なんて事を……。」

陽一の横にしゃがみ込み、声をかけてみる。

「ねえ、陽一？生きてるよね？」

陽一は返事をしない。

今度はもっと大きな声で陽一を呼んだ。

「ねえ！起きて！起きてよ！」

楓の声は虚しく響いた。

身体を揺すっても、叩いても、陽一は起きない。

もう2度と、起きることはないのだ。

「どうしよう、どうしよう、どうしよう……。」楓は呟いた。

そして、辺りを見回した。

誰も、いない。

「逃げよう。」

そう思うか、思わないかのうちに楓は走り出した。

走りながら、陽一の事を考えた。

陽一の笑顔、手、仕草、感触。

考えれば考える程、楓の目から涙が溢れて頬を伝い、雨に混じり地面へと落ちていった。

ただひたすらに、前だけを見て、楓は走り続けた。



## 5時25分

目覚ましより早く眼が開いたのは久しぶりだった。

今夜は陽一と逢えるんだ・・・。

楓は陽一の顔を思い浮かべた。

陽一は既婚者だ。

いわゆる、不倫というやつ。

誘ったのは私じゃないわ。と楓は思った。

陽一と付き合って、3年。

離婚すると言ってから2年が経った。

楓は限界が来ていた。

「いつになったら離婚するの？」楓が聞くと、

「もう少し待ってくれ。」と陽一が答える。

この繰り返しだった。

いつまで経っても離婚しない陽一に楓は憎しみを覚え始めていた。

殺意を覚えたのは2ヶ月前。

1月13日楓は陽一の子を身ごもった。

これで離婚してくれると、楓は思ったが陽一の口から出た言葉は

「墮ろしてくれ。」だった。

鏡を見ながら、楓は思った。

どうして、別れられないの？

私のどこがいけないの？

丁寧にアイラインを引き、マスカラを塗る。

化粧をしているそばから涙がこぼれおちる。

楓の心は平常心を保てなくなってきた。

もう、無理だ・・・と呟いた。



## 17時30分

楓は今日1日、陽一の事を考えていた。

陽一との出会い、付き合ってから今日に至るまでの事を。

楓と陽一が出会ったのは3年前の2月。

楓の勤める会社に陽一が派遣会社の営業で訪れた。

そして、頻繁に訪れるようになった陽一に食事に誘われた。

それから毎日電話やメールをするようになり、5度目のデートで2人は男女の関係になった。

陽一に妻がいるのは、陽一が会社に訪れた時から分かっていた。

左手の薬指に指輪をはめていたから。

分かっていたながらも、毎日陽一と話をするたびに楓は陽一にハマっていった。

陽一は優しく、楓を大事にしてくれた。

楓は陽一を心から愛し、陽一もまた、楓を愛した。

楓は、いつしか陽一と結婚することを考え始めた。

陽一もそういう言葉を口にし始めていた。

だが、陽一は毎日帰っていく。

妻の待つ家へと。

楓は許せなかった。

「いつになったら、私の元へ来てくれるの?」

何度同じ言葉を口にしたのだろう。

何度涙を流しただろう。

何度、陽一の妻を殺したいと思っただろう。

楓の頭の中は激しい憎悪でいっぱいになっていた。

陽一を愛しているが、それと同じくらい陽一を憎んでいた。

楓の妊娠で2人の関係は大きく崩れた。これで最愛の陽一が自分の元へ来てくれると、楓は思ったが陽一は離婚してくれなかった。

それどころか、「墮ろしてくれ。」と言ったのだ。

その原因はすぐに分かった。

楓の上司と陽一が子供の話をしていた。

楓と付き合っていないながら、陽一の妻は妊娠し、出産までしていたのだ。

楓は泣いた。泣いて泣いて、涙が出なくなるまで泣いて、決心した。

陽一を殺そうと。

そして、殺人の計画を立て始めた。

今日、楓はその計画を実行に移すのだ。

17時30分。

終業の時間だ。

鞆の中には、楓が自炊するのに使っていた包丁が入っている。

毎日、この包丁で食事を作っていた。

今日は違う役割を果たす。

「お疲れ〜。」

同僚の言葉も楓の耳には入らない。

楓は走って車に乗り、陽一との約束の場所へと急いだ。

## もう1人の17時30分

その日も安藤は楓の会社のすぐ近くに車を停めて、いつものように楓の退社の時間を待っていた。

こうやって、楓の事を待ち続けて何年が経っただろう。

安藤が楓の事を知ったのは、6年前。

当時、居酒屋で働いていた安藤は店に客として訪れた楓を見て、一目ぼれした。

安藤が楓に告白することはなく、ただひたすらに楓の行動を監視するようになった。

楓が陽一と付き合い始めたことも、楓が陽一の子を中絶したことも、安藤はすべて知っていた。

そして、楓が思っていることと同じことを安藤も考えるようになっていた。

「あいつ、殺してやる。」

安藤は楓を愛していた。

楓に想いを伝えられないままだったが、誰よりも楓を愛していた。その楓をひどい目に遭わせ、自分は幸せに暮らそうとしている陽一が許せなかった。

陽一の家も調べてある。

妻と、子供の名前。電話番号。

安藤は一度、陽一の家に入ったことがあった。

陽一が楓と逢っている間に、安藤は陽一の家に入りました。

新築の一戸建てだ。

もちろん、ホームセキュリティにも入っている。

しかし、妻が2階で寝ていたので意味を成さなかった。

安藤は室内を物色し、時計を盗み、また何事もなかったかのように陽一の家を後にした。

「あの時、殺しておけばよかった。」

軽く、舌打ちをしてその日のことを思い出した。

安藤の車に毛布、ガムテープ、バットが積んである。

これを使い陽一を殺そうと、安藤は考えていた。

その時、楓の車が横を通り抜けていった。

安藤は八つとして、急いで車のエンジンをかけ楓を追いかけた。

「危ねえ。もうこんな時間か・・・。」

楓の後を追いかけながら、楓を想い、陽一をどう拉致ろうか考えていた。

## 18時00分

「あと、30分か。」

陽一は楓との約束の場所に向かっていった。

先に家に電話をすることにした。

「もしもし、うん。俺。今日、お客さんと食事に行くから遅くなる。千紘は？」

電話の向こうで子供の泣く声が聞こえた。

「なに？泣いてるじゃん。わかった。じゃ、早くやってやれよ。」

おむつを替えてほしくて泣いたようだ。

「それじゃ、先に寝てろよ。」

というと、電話を切った。

1月18日に千紘が産まれた。

陽一はずっと女の子が欲しいと思っていた。

結婚して、4年。やっと恵まれた子宝だ。

「この幸せを壊されてたまるか。」

陽一の本心だった。

楓とのことはほんの遊びのつもりだった。

陽一は結婚しているし、楓も分かっていると思っていた。

最近の楓は面倒くさい。

逢えば、離婚してと言う。

はつきり言って、うんざりしていた。

今日で終わりだ。陽一は楓に別れを言うつもりでいた。

「やっぱり、誰にも言うなって言っておいて正解だったな。」

煙草に火を付けながら、陽一はハンドルを握った。

ここから待ち合わせ場所まで、20分。

「コンビニにでも寄っていくか。」

陽一はコンビニへ向かった。

煙草と缶コーヒーを買い、車にもどり携帯電話を手を取った。  
妻からメールが入っている。

千紘の写真が添付されていた。

写真を見て、微笑み、それから車を走らせた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0241k/>

---

秘密

2010年10月9日08時01分発行